

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中で、教育の基軸ともいべきものが変わっていきこうとしている。ネット社会の進展がそれに拍車をかけている。国が推進するGIGAスクール構想によって、すべての学校に高速大容量のLANが整備され、児童生徒に1人1台の情報端末が整備された。教育分野におけるデジタル化の遅れを取り戻すための環境整備であったが、学校にとっては画期的な出来事となった。

この整備は、今までの教育を根底から変える力を持っているように思う。学校は、同年齢の学習集団を学級という単位で組織し、その単位を前提に指導に当たってきた。皆が同じ内容を、同じ時間、同じ指導で授業は組まれてきた。

このことに疑問を挟む余地はなく、指導についてこられない子は劣っていると見なされる傾向があったことは否定できない。だが、本当にそうであろうか。もう少し、個に寄り添った指導ができれば、内容を十分に理解することもできた可能性は否定できない。

コロナ禍の状況と学校におけるICTの進展は、集団を解体し、個への方向展開を促すとともに、同質性から多様性へとかじを切ったように思える。

すでに、固定した学級集団をつくらず、学びの内容によって集団も学ぶ場所も変わるという学校が存在している。森の中にあるこの学校では、校舎の中心部に広大な図書館を配置し、様々なスタイルで授業が展開されている。

あるグループは協働学習を進め、あるグループは森の中で自らの学習課題に取り組んでいる。学習するメンバーも同一年齢とは限らない。教室も画一的ではなく、学びの内容に合わせて大小あり、机の配置も多様である。校舎の外に広がる野原と森も、子どもたちの大好きな教室である。

この学校は、2020年4月に開校した。ホームページを見ると、次のことが載っていた。

私たちは、講義中心の一斉授業・画一的なカリキュラム・固定的な学級編成等に代表されるような従来型の学校教育に限界を感じている一方で、子ども自身と公教育の可能性を信じています。

〇〇学園で、じっくり、ゆったり、たっぷり、まぎって過ごした子どもたちは、結果的に様々な「 」になる” 子どもたちは、「 」にどんな願いを込め、どんな「 」になっていくのでしょうか。それを決めるのは、子どもたち自身です。

野田中学校で過ごした子どもたちは、どんな「 」になっていくのか。上記の学校では、従来型の学校教育に限界を感じてはいるが、公教育の可能性を信じているという。本校が行っているのは、公教育である。公教育には、まだまだ可能性がある。そうであるならば、もっともっと創意工夫が必要である。教育の在り方が変わろうとしている今だからこそ、「 」を埋められるような教育が求められている。